



# 東西勢力の衝突で 再び注目を集めはじめたリビア

(一財) 国際開発センター 研究顧問 畑中 美樹

## トリポリ進軍を開始した東部拠点の「リビア国民軍 (LNA)」

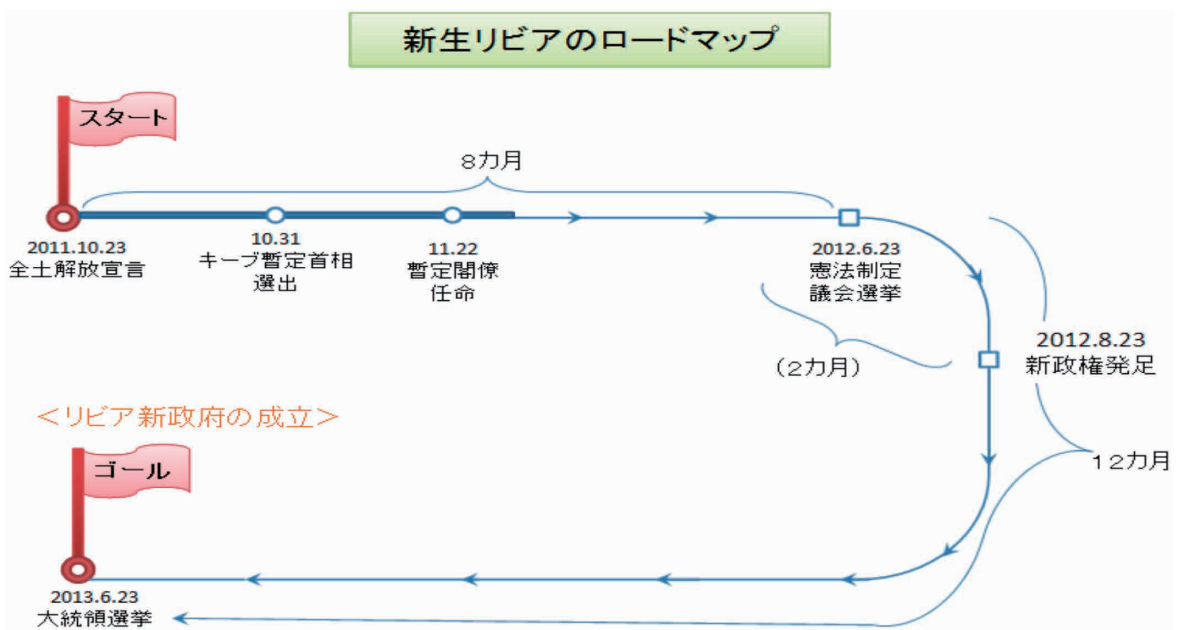
リビアは全土解放宣言 (2011年10月23日) から約1ヵ月後の2011年11月22日には暫定閣僚を任命し, 遅くともそれから1年半強を経た2013年6月下旬には大統領選挙を実施して新生リビアをスタートするとの野心的な政治行程表を描いていた (表1)。

しかし, それから既に約7年半を経た2019年4月になっても, 当時のリビアが抱えていた諸問題 (表2) の大半が解決されないままとなっている。

こうした中, リビア情勢が再び注目を集めている。元国軍将校のハリファ・ハフタル司令官・将軍の率いる東部拠点の軍事組織「リビア国民軍 (LNA)」が, 2019年4月12日, 国連の支持を受けた国民合意政府 (GNA) 側の部隊と首都トリポリ郊外で戦闘を繰り広げているからだ。

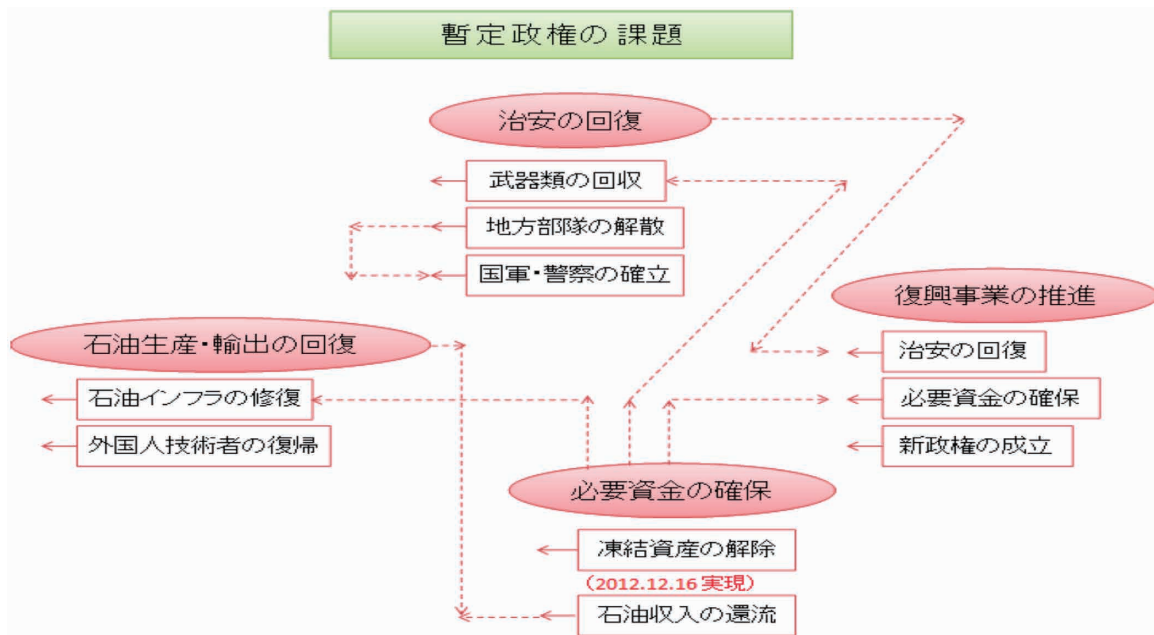
首都トリポリには国連の支援するシラージュ暫定政権が存在する。周知のように, ハフタル司令官の率いるリビア国民軍 (LNA) は, 東部トブルクの代表議会 (HoR) と連携し

表1 新生リビアの政治行程表



出所：筆者が2011年11月下旬作成のもの。

表2 リビア暫定政権の課題



出所：筆者作成のもの。

てリビア東部地域を実効支配してきた。そのリビア国民軍（LNA）が4月4日からトリポリ制圧を目指した進行を開始したことから、少なくともその後の数日にわたる戦闘で、数十人が死亡し約8000人が避難を余儀なくされる事態に発展してしまった。

このため国連のサラメ特使は4月9日、砲撃や空爆が行われている中での参加の呼び掛けはできないと語り、今月14～16日にリビアで開催を予定していた「国民会議」を延期する意向を表明した。国連主導の「国民会議」は、本来であれば昨年には実施されるはずでありながら見通しの立たなくなった大統領選挙及び議会選挙の実現に向けた道筋などの協議を予定していた。

この間の4月5日には、グテレス国連事務総長がハフタル司令官とベンガジで会談し、リビア内戦の再開の回避に向けた政治解決を求めたものの成功しなかった。また同日には、国連安全保障理事会が開催され、トリポリ近郊での軍事衝突に懸念を表明すると共に、ハフタル司令官の率いるリビア国民軍（LNA）に対してあらゆる軍事活動の停止を要求したが、こちらも無視された形となっている。

既に、米国を含む各国が駐留軍や駐在員をリビアから退去し始めたほか、国連も一部の職員を撤退させている。さらに、トリポリ市民も、ハフタル司令官が東部都市ベンガジをイスラム過激派から奪い返した2017年の時と同じように衝突が長期化する事態に備えて食料や燃料の備蓄を開始している。

### イスラム主義者を嫌うハフタル（LNA）司令官

「リビア国民軍（LNA）」を率いるハフタル司令官とは、一体、どのような人物なのであ

ろうか。同氏が生まれたのは1943年のことで、誕生地は東部のアジュダビーヤであった。カダフィ政権時代には古参の軍幹部であったハフタル氏は、1980年代にはリビア国軍司令官としてチャド紛争に従事していた。しかし、1987年に同国で敗北し現地で捕虜となってしまった。

ところが当時、カダフィ大佐がチャドにリビア軍はいないと公言しハフタル氏を見捨てる動きに出たことから、同氏はその後の20年間強に亘りカダフィ政権打倒の運動に加担することとなり、米国を含む北大西洋条約機構(NATO)とも連携することとなった。

ハフタル氏は、その後政治亡命した米国のバージニア州で反カダフィ運動を行ってきたことから、CIAとの関係が噂されるようになった。そのハフタル氏は「アラブの春」が起きるや2011年初、密かにリビア入りした。そして、2011年2月17日の反カダフィ戦闘の開始後は、東部の野戦司令官の1人としてカダフィ軍との戦闘に従事している。

だが、2011年10月下旬のカダフィ大佐の死亡後、ハフタル氏の動静はしばらく伝えられなくなってしまった。ところが、同氏は2014年2月、突然テレビに登場し国家再建に関する考え方を説明の上、当時の西部の制憲議会(トリポリ)に対して立ち上がるよう国民に呼びかけることとなった。

さらに、ハフタル氏は2014年5月、東部ベンガジで「尊厳の戦い」作戦と呼称するイスラム主義者の掃討作戦を開始し、3ヵ月の2014年8月には東部の新議会により新参謀総長に任命されている。尚、ハフタル氏は同年夏に世俗派とイスラム勢力の対立から東西に政府が分立した際には、米国と共に直近の選挙で勝利していた世俗派中心の東部トブルク政府の支持に廻っている。

加えて、同氏は翌2015年3月になるや東部の新議会によりリビア国民軍(LNA)の最高司令官に任命され、この頃からイスラム主義者との戦いに乗り出している。特に、ハフタル氏は内戦状態が長引くなか、穏健派のイスラム政党にまで「テロリスト」のレッテルを貼り攻撃を開始している。

そして2016年2月、ベンガジの大半からイスラム主義者を駆逐したのに続いて、2ヵ月後の2016年4月には、ベンガジ郊外及びイスラム国(IS)が拠点化していたデルナからもイスラム主義者を駆逐させることに成功している。

---

#### 筆者紹介

慶應義塾大学経済学部卒業(1974年3月)、1974~1980年富士銀行勤務後、1980~1983年(財)中東経済研究所出向。1983年富士銀行復職後(1月)、同行を退職(10月)。

(財)中東経済研究所・カイロ事務所長を経て、1990年同研究所退職。1990年12月~2000年9月(株)国際経済研究所勤務(主席研究員)、2000年10月~2005年3月(財)国際開発センター エネルギー・環境室長、2005年4月よりエネルギー・環境室研究顧問。中東や北アフリカ諸国の王族、政治家、政府関係者、ビジネスマンに知己が多く、中東全域に豊富な人的ネットワークを有する。専門領域は中東経済論。

※著書『「イスラムマネー」がわかると経済の動きが読めてくる!』(すばる舎、2010年)『中東のクール・ジャパニーズ』(同友館、2009年)『中東湾岸ビジネス最新事情』(同友館、2009年)『南地中海の新星リビア』(同友館、2009年)『今こそチャンスの中東湾岸ビジネス』(同友館、2009年)、『オイルマネー』(講談社現代新書、2008年)、『石油地政学』(中公新書ラクレ、2003年)

---

尚、ハフタル氏は、従来から国連主導で誕生の統一政府に不満を持つとされる。今回の突然のトリポリ攻撃の背景にも、国連主導での国家統一を嫌う同氏の考え方が反映されているのかもしれない。

## 気になるイスラム国 (IS) の壊滅の影響

リビアの当面の情勢は、東部のハフタル司令官の率いるリビア国民軍 (LNA) と西部の国民合意政府 (GNA) を支持する勢力との争いの行方にかかってこよう。しかし同時に、今後のリビア情勢を考えるに際しては、中東で起きた最近の動きが与える影響の有無も見ておく必要があるようだ。それはイラクからシリアに至る一帯に領土を確保していたイスラム国 (IS) の敗北が、その他の中東・北アフリカ諸国に影響を及ぼすのか否かである。

IS の掃討作戦を行ってきた米軍主導の有志連合は2019年3月23日、IS がイラクからシリアにかけて樹立を宣言していた「カリフ制国家」を東部バグズで完全に壊滅させたと発表した。だが、米軍主導の有志連合とその支援を受けるクルド人主体の民兵組織「シリア民主軍 (SDF)」は、IS との戦いが依然終結していないと警告を発している。

何故ならば、IS がシリアの砂漠地域やその他地域に今でも戦闘員を潜伏させ、シリア民主軍 (SDF) の支配地域での破壊的攻撃を続けると主張しているからだ。加えて、IS の戦闘員の一部がシリア、イラク以外に既に逃亡してしまった可能性も否定できず、両国から脱出し出身国やその他紛争地域に帰還・移動した者たちによる各地でのテロの脅威が高まったとも考えられるからだ。

IS が既に一部のアジア・アフリカ諸国の反政府勢力と協力関係を構築済みであることは知られている。特に、アフガニスタンやリビア、エジプトのシナイ半島、イエメン、フィリピンでは、IS に同調する組織による活動が見て取れる。

領土を喪失したISの今後の残存戦略の一つと言われるのが、一時的ながら一定の領地を確保していた地域や諸国での活動の活発化である。その有力先とされているのがリビアである。リビアに進出したISの多くは2016年に同国から追放されたとされるが、それでも戦闘員や同調者・支持者のすべてが追い出されたわけではなかった。

ISは、地中海を挟んで対岸にあり、しかもイタリアとは距離的にもそれほど離れていないリビアを現在も重視しており、今でも同国に密かに拠点を維持しているとされる。しかも、今年に入ってシリアにおける占領地が急速に縮小するなか、多くのIS戦闘員がシリアやイラクからリビアに向かったとも言われている。

実際、国民合意政府 (GNA) のリビア内務省が、特にエジプト及びチュニジアとの国境沿いの防衛が穴だらけであることもあって、侵入者を止めることは難しいと率直に認めているほどである。

以下では、今後のリビアにおけるISの影響力を考える一助として、ISのリビアにおけ

る勃興と衰退について改めて振り返って整理することとしたい。

## 東部デルナを拠点に拡大したリビアのIS

イラクとシリアを本拠とするISの影響力がリビアにも及ぶことが懸念され始めたのは2014年秋頃のことであった。ISの拠点となったのは、かつてアル・カイダ系組織の根城であった東部の都市デルナだった。当時、デルナの政府庁舎にはイスラム国の旗が掲げられていた。消息筋によれば、イスラム国は人口10万のデルナに支部を置き約800人の戦闘員を配置し、郊外に設営した6～7の訓練場を運営して戦闘員を訓練していた。

イスラム国のデルナ支部の中核を成したのが、シリアのデイル・エゾルやイラクのモスルでイスラム国のアル・バタル旅団に属し、その後リビアに舞い戻った約300人の戦闘員であった。彼らはデルナの親イスラム国の組織である「デルナ・イスラム青年諮問評議会」を熱烈に支持していた。

かつては自らがリビアの聖戦主義者であったクイリアム財団のテロ専門家ノーマン・ベノトマン氏は、当時次のように語っていた（CNN ニュース 2014年11月18日）。

- ① 今日のデルナは、シリアにおけるISの本拠地ラッカと同じように見える。
- ② イスラム国は「東部リビア・イスラム首長国」を創設する途上にある。イスラム国はリビアにとって真の脅威となっている。
- ③ ISのバグダディ最高指導者は、デルナを奪取するに当たり上級指揮官の1人アブ・ナビル・アル・アンバリをリビアに派遣した。同人はバグダディ氏とイラクの収容所暮らしを経験している。
- ④ デルナの最高裁判官となったサウジ人説教師アブ・アル・バラアア・エル・アズディ師の支援を受けながら、アブ・ナビル・アル・アンバリの努力は実を結んだ。
- ⑤ 2014年11月中旬、自らを「リビアのムジャヒディン」と呼ぶ新たな汎リビア集団がアブバクル・アル・バグダディ最高指導者への忠誠を誓い、リビアを「バルカ」「トリポリ」「フェザン」に3分割すると宣言した。

またデービッド・ロドリゲス米軍アフリカ司令部司令官・陸軍大将も2014年12月3日時点で記者団に次のように述べ、ISがリビア東部に訓練場を開設したことを確認していた。

- ① 東部のISの活動は極めて小規模で始まったばかりだが訓練場を開設した。
- ② 訓練場には数百人の戦闘員がいる。米軍はリビア東部のISが拡大するのか否か、将来何が起きるのかを注意深く監視し続ける。

こうしたなか東部デルナのイスラム過激派は2014年12月11日、「東部政府に近い勢力による攻撃が開始される前に『ムジャヒディン（イスラムの大義に則した聖戦に参加する戦士たち）諮問評議会』と呼称する新たな連合を結成した」との声明を発表し、新たな連合を結成したことを明らかにした。

その後、ISは2015年6月9日、ネット上でリビア中部のシルテを制圧したとの声明を発表した。ISは、具体的には、SNS上で、1) 発電所は制圧された、2) 発電所制圧でシルテ市内全域から敵はすべて追い出された、と述べていた。他方、首都トリポリを中心にリビア西部を支配していた反体制勢力の政府は、同日、ISから発電所への攻撃を受けて撤退し攻撃で3人が死亡したことを明らかにした。

ISは2015年には驚異的なスピードでリビアにおける支配地域を広げていた。当時のリビアにおけるISの戦闘員数を、国連は2000から3000人と推測し、米国の情報当局も5000から6000人、フランス当局は1万人以上と見積もっていた。数字に差はあるが、どの推測においても共通していたのは、ISがとにかく急激にその規模を拡大していたことであった。

このようにISはリビアにおける政権の空白状況を利用して、東部の小都市ダルナから勢力を伸ばし、海岸沿いの約240kmの領土を支配下に置き、地中海に面したカダフィの故郷シルテを本拠地とするに至り、さらには石油施設を攻撃して占領しIS指導部の人員を施設の監督に任命するまでに至った。

## 瞬く間に大多数が追放されたりビアのIS

リビア暫定政府部隊と北西部ミスラタの民兵を中心とするシルテ奪還作戦が開始されたのは、シルテがISに奪われてから1年弱が経過した2016年5月半ばになってからのことであった。だが奪還作戦の開始後も、ジョン・ブレナン米中央情報局（CIA）長官は2016年6月16日、米上院情報特別委員会で次のように証言し、ISの影響力は衰退していないとの見方を披歴していた。

- ① ISは次第に様々な支部を相互に関連するネットワークに育て上げている。
- ② 戦闘員数が5000人から8000人のリビア支部は、最も最先端且つ最も危険な存在である。
- ③ ISは、リビアISのアフリカでの影響力を高め、アフリカや欧州での攻撃を計画している。

だがりビア元政府高官は、ジョン・ブレナン米中央情報局（CIA）長官のこの発言の頃、同国のISについて次のように説明し、ISがリビアで広い支持を集めることはないとは断言していた。尚、この高官の発言はリビアにおける今後のISの動きを考えるうえで、極めて

有益である。

- ① 国外から侵入してくる IS は、イラクやシリアからの真正 IS ではない。
- ② リビアの IS では、チュニジア人の職にありつけない健康だが貧乏な若者たちが大部分を占めている。
- ③ 彼らはシルテに入り、兵役トレーニングセンターで兵役訓練を受け戦闘員になるので、我々はチュニジアン IS と呼んでいる。
- ④ 但し、勿論、スーダン、チャド、モロッコ、アルジェリア、エジプトなど近隣諸国の若者約200人も加入してはいる。
- ⑤ 他方、兵役訓練の教師は、旧カダフィ軍隊旧第32ハミス正規軍のリビア人兵士（カダフィ忠誠者）、或いはブラックアフリカの旧傭兵部隊の残党兵が担っている。
- ⑥ 東部デルナには、アフガンやイラク、シリアで IS 戦闘員として参戦していたリビア人戦闘員（Libya Islam Fighting Group, 通称 LIFG など）約300人が帰還した。
- ⑦ またデルナにいたアル・カイダ系イスラム過激派約500人が IS 戦闘員に転向している。
- ⑧ さらに主にアルジェリアから流入の「イスラム・マグレブ諸国のアル・カイダ（AQIM）」の戦闘員約300人もリビアの IS 戦闘員に転向した。
- ⑨ 加えて、旧カダフィ時代の処刑者の子息等約500人も IS に忠誠を誓った。
- ⑩ だが残虐な処刑など IS の唱道する「カリフ国の建設」と異なる実態が判明するにつれ脱退者が急増した。
- ⑪ 脱退者の多くが2015年春に結成された「デルナ・イスラム青年評議会」に加わり IS 駆逐の戦闘を開始した。
- ⑫ 「デルナ・イスラム青年評議会」は2015年夏ころ（7月）には IS のデルナからの駆逐に成功し、彼らを南東部のファタイエ山岳地帯に追いやった。
- ⑬ ファタイエ山岳地帯に逃げ込んだ混成部隊の IS のうち約500人が陸路シルテに逃走したが、今も山岳部に潜むのは100人程度であろう。

話が少し横道にそれたが、シルテ奪還作戦が大きな成果を見せるようになるのは、同年8月1日から実施に移された米軍の空爆の効果が大きかったためのようだ。実際、リビアの暫定政府部隊やそれに協力する民兵組織は8月17日までに、ISのリビアにおける最大拠点であるシルテの中心部をほぼ奪還することに成功している。

米軍はこの2週間強の期間だけで、ISの装甲車両などを狙った空爆を少なくとも48回実施していた。この間、リビア親暫定政府の部隊は、空爆で勢いを失ったISの間隙を突くように IS 防衛網を戦車で撃破し、兵士を次々と突入させていった。IS が重要拠点化していたシルテ国際会議場の8月10日の奪還劇が、その最初の大きな成果となった。因みに、そ

の時点でシルテの当局者は、シルテの70%が解放されたと述べていた。さらに、リビア暫定政府部隊と北西部ミスラタ民兵部隊は、その6日後の8月16日にシルテ市の主要住宅地を奪還し、上述したように翌8月17日にはシルテの中心部をほぼ制圧している。

シルテで劣勢に立たされたIS戦闘員は、その後もシルテ郊外に潜伏し自爆テロなどで執拗に抵抗を続けた。しかし、それでも抵抗運動に加担したIS側の生存者は最大数百人と見られ、残る多くの者は南部地域に逃亡してしまった。

尚、最終的に、リビア統一政府部隊がISの掌握していた最後の主要拠点シルテの完全制圧を明らかにしたのは、それから約3ヵ月半後の2016年12月5日になってからのことであった。

## リビアにおけるISの最近の動静

ISが拠点としていたシルテを完全に奪還されて以降の1年半は、リビアにおけるISの動静が伝えられることはほとんどなかった。そのリビアのISについて久方ぶりに警告を発したのは、エジプトの政府機関である宗務裁定庁であった。

実は、同庁は2018年7月末に発表した報告書で、ISがリビアにおいてモスクを活用して改めて自分たちの思想・考え方を広めはじめて若者たちを勧誘する動きをしている、と指摘してリビア当局に警告を発していた。

同報告書は、具体的には、1) ISが聖戦(ジハード)の意義を若者たちに吹き込んでいる、2) ISが若者たちにビデオゲームを供与する形で、戦闘のやり方を教授している、3) これらの勧誘活動の中心となっているのがISのかつての本拠地である東部デルナのモスクである、としてリビア政府にモスクの監視を今一度強化する必要性を訴えていた。

この報告書から約5ヵ月後の2018年12月25日午前9時半(現地時間)、3人の武装集団が首都トリポリにある国民統一政府の外務省の大臣専用棟に対して自爆攻撃を行う事件が発生した。3人は庁舎近くで自動車爆弾を爆発させた後、銃を発砲している。

その後、襲ってきた武装集団3人のうちの2人は大臣室に向かった後に自爆し、残る1人は外務省入り口で殺害されている。他方、この攻撃によって政府側においても外務省の高官を含む3人が死亡し18人が負傷している。尚、事件翌日の12月26日、ISが傘下の通信社を通じて犯行声明を発表した。

## 結びに代えて

どの程度続くかの正確な予測は難しいが、リビアでは当面東西勢力による武力衝突が続くことになろう。現時点ではハフタル司令官の率いる東部の「リビア国民軍(LNA)」が押し気味に推移しているが、国民合意政府(GNA)側にも徐々に有力民兵勢力が加わり始めたので、武力解決が仮にあるとしても相当の時間がかかることが予想される。



懸念されるのは、この新たなリビアの混乱に乗じてシリアやイラクで敗走したIS戦闘員の一部が密かにリビア入りする事態である。そうなればリビアは二重の混乱に見舞われることとなり、一般国民の待ち望む新生リビアの誕生はさらに遠のくことになってしまう。

だが筆者は、再度の混乱に陥ったリビアでISによるテロ事件が今後発生する可能性は否定しないものの、同国がISの強い影響下に置かれる事態は決してないと見ている。

勿論、リビアも各地に武装勢力や軍閥が今でも群雄割拠しているので彼らの一部が自らの勢力の拡大のためにISを利用する形で組むことや、長引く内戦、政治闘争のために雇用機会が生まれず不満を覚えている若者がISに同調することは考えられる。だが、筆者がISのリビアでの影響力の拡大が容易でないと見ているのは、何よりもリビアではシリアやイラクのように国民が宗教面では分裂していないことである。実際、IS幹部もリビアのシルテ市を何とか拠点化した後、リビアでは武装勢力が乱立し、政治面での諸派間の相違が激し過ぎることもあって宗教を前面に掲げるISの同市以外への拡大が極めて難しいことを認めていた。

果たして、カダフィ政権の打倒から既に7年半以上を経過したりビアが東西両勢力の武力衝突を如何に切り抜け、再進出の機会を狙うISの願いをどのように打ち砕くことになるのか注目したい。

英語名：IS targets again Libya under East-West heavy battle.

\*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。